

日本山岳会創立90周年 記念式典・晩餐会・フォーラム 華々しく開催



1995年(平成7年)
12月号(No.607)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目次

日本山岳会創立90周年記念式典・晩餐会・フォーラム華々しく開催…1
 記念式典・晩餐会 皇太子殿下もご出席……………1
 記念フォーラムについて……………3
 ヨセミテからのメッセージ……………4
 私の山行・中高年登山の楽しみ6
 ヒマラヤ登山・その回顧と展望7
 丹沢・三ノ塔の記念山行に参加8
 新名誉会員紹介……………9
 今西壽雄元会長を偲ぶ……………10
 山の切手・3……………10
 東西南北
 エコロジストへの道(2)……………11
 元老と熟年会員北奥千丈岳へ……………11
 カザフスタン・キルギスタンのトレッキング……………12
 海外の山……………13
 報告
 探索山行・奥美濃大日ヶ岳……………14
 三水会・創立20周年記念の会……………14
 第6回赤シャツの集い……………15
 新入会員・住所変更……………16
 書籍受入報告……………16
 会務報告……………17
 山と医療……………18
 INFORMATION……………18
 創立90周年記念事業募金応募状況19
 会員異動・ルーム日誌……………19

- ▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜日 10～20時
水・金曜日 13～20時
- ▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜日を除く毎日 13～20時
- ▶年末年始休み12月29日～1月5日



記念式典は18時から開催された 挨拶する村木会長

日本山岳会創立九十周年記念事業として、マカールー登山隊一九九五は、五月二十一日、東稜からの初登頂に成功した。六月十七日の九州ブロックを皮切りに、ブロック別式典・諸行事が次次に行われ、十月十四日に東京・新高輪プリンスホテル国際館パミールで全会の記念式典・晩餐会・フォーラムが開催された。

フォーラムは「日本山岳会は百周年に向けて何をなすべきか」をメインテーマに、三部会形式で午前十時から午後四時半まで、「白雲」「慶雲」の二会場で行われ、式典・晩餐会は午後六

時「北辰」の間で開催された。初めての試みとして、各委員会、同好会の活動報告をパネルを使用して展示、山岳絵画展とともに好評であった。また、二火会、山げら会、女性会員による「お抹茶サービス」、恒例のJACグッズ販売コーナーも設けられ、人気を博していた。

翌十五日に、丹沢山・三ノ塔の記念登山が行われ、百二十五名が参加した。以下、会報編集委員が分担してレポートする。写真は会報委員のほかフィルムビデオ委員会の協力を得た。

(会報編集委員会)

記念式典・晩餐会 皇太子殿下もご出席

記念式典・晩餐会は午後六時から国際館パミール三階の大宴会場「北辰」

の間で開催され、皇太子殿下をはじめ海外から中村テル、蔡禮樂兩名賛助会員、全

国より七百五十六名の会員が出席した。記念式典は大屋梯二総務担当常務理事により進められた。

■村木会長挨拶

―九十年を回顧し、将来への道標を―
冒頭挨拶に立った村木潤次郎会長は、「今夕は皇太子殿下をはじめとして、来賓の方々、大勢の会員の皆様方に、九十周年記念行事にご参集いただき、主催者一同心から喜んでおります」と謝辞を述べて、大要次のように語った。「日本山岳会は明治三十八年十月十四日、東京で初の会を開き、その日をもって創立の時と定めている。この年は、日露戦争が終結し、九月五日にはポーツマス講和条約が締結され、日本中が戦勝に酔い、これからいよいよ列強に伍して大いに発展するという、国中が意気軒昂たるときであった。その後、明治、大正、昭和、平成の四代にわたり、日本の近代史をなぞるような山と谷をへて、今日に至ったわけだが、それなりに日本山岳会も、日本登山界も発展してきた。

たとえば大正デモクラシーの時代は混沌のうちにも、いろいろな可能性を秘めた時代といわれているが、その時代に大学、旧制高等学校、旧制専門学校など、多くの学校に山岳部が生まれのちのちその先輩方が日本山岳会の指導的地位を占められるに至った。その

大正デモクラシーも終焉の昭和六年、日本山岳会は会則を改正、初めて初代会長に小島鳥水さんが就任した。これまた考え合わせると、満州事変の年であり、まさに日本が激動の時代に入る時であったかと思う。のちの十五年戦争などといわれる、うっとうしい時代に入ったわけだが、本会、登山界は非常に意気軒昂であり、何が何でもヒマラヤへ行きたいという意気込みが燃えさかった時期であった。その一つの現れが昭和十一年、堀田弥一隊長率いる立教大学隊による、ナンダゴート登頂であった。

そのあとだんだん準戦時体制が厳しくなり、ヒマラヤに行けなくなった。ただし、ヒマラヤ登山の前提通過事例として台湾、北朝鮮、満州の山々に数々の探検的登山が行われていた。

しかし昭和十六年、大東亜戦争に突入するとともに、日本は非常に惨めな状態におかれ、東京も火の海となり、わが会の虎の門ルームも焼失し、敗戦を迎えるに至った。

戦争が終って、衣食住不足の惨めな時代ではあったが、山に登ろうという青年たちの意気込みは非常に強いものがあった。時の会長は松方三郎さん、副会長は藤島敏男さんと三田幸夫さん。この陣容に向かって、青年たちは各自の夢を求めて山岳会に集まった。

昭和二十五年、それまでも山登りにご関心が深く、山岳会のためにもお力添えをいただき、すでに英国のアルパインクラブ名誉会員であられた秩父宮殿下を当会の名誉会員に推戴した。しかし残念なことに、その三年後、殿下はお隠れになった。

その時期は、戦中、戦後のヒマラヤ熱が再び燃えさかる時で、マナスルの計画があった。一つの総決算の意味で、昭和三十一年、榎有恒隊長率いるマナスル登山隊が、初めて八〇〇〇メートルの頂上をきわめた。

それ以後は皆さんご承知のとおり、本日のフォーラムで十二分に議論されたとおりだが、日本の登山界の発展ぶりはまさに目を瞠るようなものがあった。山岳会に限っても、一九七〇年のエベレスト登頂、ナンダデヴィの縦走、一九八〇年の中国側からのチョモランマ北壁登攀、八十周年を記念してカンチェンジュンガ縦走。今年の九十周年を記念してのマカルー東稜登攀があり、まことにビッグイベントを重ねた状態だが、この四十年の中で特筆すべきことは、女性の活躍ぶりであった。田部井淳子さんが女性だけの力でエベレストに登られてからも、今日まですでに二十年を経過している。この間の日本の登山の勃興は、目覚ましいものがあった。

話を交え、山岳会の五十周年記念は東京文化会館で行われ、出席会員八十名。八十周年は椿山荘で行われ、四百二十名出席。本日は概数で七百六十名ということで、如実に日本の登山界ならびに日本山岳会が栄えているように見える。

そして忘れられないことは、五十年の時も、八十周年の時も秩父宮妃殿下のご臨席をいただいていた。妃殿下は秩父宮殿下のご遺志を継がれて、秩父宮記念学術賞というものを通して、山の、あるいは登山を通じての学術の研究に従事された方を激励された。日本山岳会に対しても大変お心遣いをいただいた。しかし、誠に悲しいことに今夏の終りにお隠れになった。本日もお元気でいらっしゃれば、お迎えすることができたのに残念である。

ただ、それに引き換えて昭和六十二年、皇太子殿下が会員としてご入会くださり、本日もこの席に光を添えていただいているのは誠に光栄である。

このように述べてみると、日本山岳会はいかにも隆昌極まりないようだが、実は私はそうは思っていない。現在中高年者が大変な勢いで山に行く。それは大変いいことであるが、同時にいろいろな問題が発生してきた。それから海外登山でだんだん若い人が減ってきて。これからどうするのか、これから

話を変え、山岳会の五十周年記念は東京文化会館で行われ、出席会員八十名。八十周年は椿山荘で行われ、四百二十名出席。本日は概数で七百六十名ということで、如実に日本の登山界ならびに日本山岳会が栄えているように見える。

の登山をどのような方向にもっていくのか、ということが問題点として残っている。それらを全部含めて、我々の修行の場であり、楽しみのある山というものを、どの様にして大事にしなければならぬのか、という問題も明快な答えはあるようでない。そんな状況だ。

先ほど、大正デモクラシーの時代は混沌としていたと言ったが、今はまさに平成の豊かさの中に溺れていて、先がよく見えず混沌としている時代のようには思える。その中で日本山岳会の仕事をお預かりしている者としては、目の前の二十一世紀、十年後の百周年に向かって、しゃしゃり出るつもりは毛頭ないが、後の方々には何かいい道標を残して行きたいというのが、私どものささやかな願いである。

本日ご出席の皆様方、来賓の皆様方先輩の皆様方に、どうかお力添えをいただきたいという気持ちでいる。最後はそういうお願いを繰り返すことによって、私の挨拶とさせていただきます」

■名誉会員は十一氏

続いて物故者黙禱、坂田三郎日本山岳協会会長の来賓祝辞(代読・北田紘一同会常務理事事務局長、橋本龍太郎会員(自民党総裁)らの祝電披露のあと、名誉会員の発表が行われた。

今年の新名誉会員は大澤伊三郎(欠)

金山淳二、奥野正亥(欠)、朝比奈奈三(欠)、風見武秀、藤平正夫、港叶、今井友之助、今井喜美子、牧野衛、梅棹忠夫の十一氏。出席の八氏に村木会長より名誉会員章が手渡された。

代表で挨拶に立った今井喜美子新名誉会員は「私は日本山岳会創立の年に生まれ、本年九十歳。九十周年の席で名誉会員章をいただき、恐縮しておりますが、こんな嬉しいことはありません。日本山岳会は年々ますます盛んとなり、どんどん太っていくが、私は反対にやせて萎びていく。でも私の心にはいつも山があり、生ある限り頑張りますのでよろしくお願いします」と述べ、万雷の拍手をあげた。

■乾杯の音頭は金山名誉会員

以上で記念式典を終え、記念晩餐会に移した。司会は中川武総務・集会担当常務理事。

冒頭、藤平正夫創立九十周年記念事業委員長は「皆さんのご協力のおかげで、かくも盛大な記念式典を施行できました。次の百周年までには、いろいろな深い問題があり、それをどう乗り越え、日本山岳会のステータスを立派に維持していくのか、大変なことだと思ふ。そのスタートとしての意味での、九十周年記念式典と私はとらえている」と挨拶。続いて映像委員会製作による記念ビデオ「人を讃え、山を究める」が

上映された。

開宴に先立ち、金山淳二新名誉会員が「皇太子殿下のご臨席を仰ぎ、この席だけでなく、全国の会員の心を体してお祝いを」と乾杯の音頭をとった。待ちに待った会食は七十四の円卓を囲んだフランス料理のコース。バックミュージックの美しい音色が雰囲気盛り上げる。マカルー登山隊、ムスター

記念フォーラムについて

記念フォーラムの構想は九十周年記念事業計画のスタートの時からあり、いろいろ検討の末、形が明瞭になったのは六月頃であった。

フォーラムの基本的考え方は、当面する諸問題に対する会の姿勢を内外に示すとともに、百周年へ向けての努力を促すことにあった。このため一般にも公開することにした。テーマは日本山岳会がいま抱えている三つの問題「海外登山」「環境」「中・高年」とし、これにどのように対応していくかを正しく示そう、というものであった。「海外登山」については「その歩みと将来の展望」と題して大谷亮さんが中心となって進めてくれた。「環境」については、筆者が推進者となり、小

グアタ登山隊の隊員紹介、第三十一回秩父宮記念学術賞受賞者紹介、新入会員紹介、地方支部紹介と滞りなく進み、やがて皇太子殿下ご退席の時を迎えた。出席会員の会場内歓談はなおも続いたが、やがて閉会、この余韻は翌日の蔡禮樂名誉会員も参加した、親睦山行「丹沢・三ノ塔」に引き継がれた。(公報編集委員・高田真哉)

記念フォーラム実行委員会

野有五さんの協力を得て、ヨセミテ協会のステイブン・P・メドレー会長をお呼びすることができた。「中・高年」については、斎藤惇生副会長に関西支部中心の企画を引き受けていただいたが、途中病に倒れられ、山口俊輔さんがその後を引き継いで、うまく仕上げてくれた。

当日は皇太子殿下ご夫妻のご臨席を仰ぎ、素晴らしいフォーラムとなった。各会場はいずれも熱気のもった雰囲気にも包まれ、出席された約千人の方々には何かの感銘を与えることができたのではないだろうか。三つのフォーラムを一緒に進めてくださった皆様とともに喜びたいと思う。

(委員長・大森弘一郎)

記念フォーラム・I

ヨセミテからのメッセージ
—山の自然保護のために—

自然保護委員会は、ヨセミテ国立公園の管理に携わっておられるステイーブン・P・メドレー氏をお招きし、上高地や北アルプスの自然保護の将来を考える催しを行った。ヒマラヤもアルプスもあるなかで、なぜヨセミテか、といぶかる会員もおられるに違いない。しかし、日本山岳会がウエストンや上高地と切り離せないように、ヨセミテと上高地は、日本山岳会の創立者の一人である小島烏水を通じて、しっかりと結びついているのである。

上高地や日本アルプスが、かつて氷河に覆われたか否か。これは日本山岳会が設立された当時の最も熱い論争であった。大学の研究者たちがごぞつてヨーロッパアルプスをお手本に日本アルプスの氷河地形を論じていた中で、ひとり烏水だけは、日本アルプスと緯度も高度も似ているシエラネバタこそ、比較の対象としてふさわしい山であることを見抜いていた。恐るべき眼力といわねばならない。岳人としてこの論

争に深く関わった小島烏水が、自ら正金銀行サンフランシスコ支店への勤務を希望したのは、この目でシエラネバタの氷河地形を確かめたいという、烏水の情熱のなせる業であったともいえる。

烏水が初めてヨセミテに入ったのは一九一五年のことであった。八十年目にして、私たちは、烏水が夢見た上高地とヨセミテの本格的な比較をようやく実現することができたのである。山岳会創立九十周年を祝う事業として、それは十分に意義のある催しであったといえるであろう。

上高地を知らないメドレー氏に現地を見ていただき、実際に現地で討論をするため、私たちは、自然保護委員会の有志やそのほかの参加者四十一名とともに十月八日から上高地の山研に入った。紅葉の連休時を選び、上高地の混雑度をヨセミテと比較したかったからである。好天に恵まれ、一日目は梓川沿いの状況を、二日目は独標まで登って、登山者で賑わう山小屋や登山道の様子を見ることができた。日本山岳会の共催で十一日に松本市内で開いたメドレー氏の講演会「ヨセミテから上高地へのメッセージ」(共催・上高地自然史研究会)には百名を超す参加者が集まり、上高地の将来をめぐって、活発な意見を交わすことができた。

上高地と、ヨセミテ国立公園の中心をなすヨセミテ・バレーは、烏水が注目したように極めて類似している。面積も幅もほぼ同じ谷間を、ヨセミテではマーセッド川が流れ、上高地では梓川が流れる。そのヨセミテ・バレーに訪れる観光客は年間四百万人。上高地のざつと二倍であるが、十一月から四月まで閉鎖される上高地に対してヨセミテでは年間を通じた利用があるから平均すれば、どちらもほぼ同じような人為的インパクトにさらされているといえよう。

しかし、同じ数の人間が押しかけてくるにもかかわらず、上高地とヨセミテでは、自然の管理方法はまったく対照的である。夏には七百人を超えるスタッフが常駐するヨセミテの国立公園局。これに対して、環境庁のレンジャーがたった一人の上高地。そのためレンジャーは島々にある中部山岳国立公園の管理事務所をなかなか離れられず、上高地に常駐さえできないのが、日本の現実なのだ。

ここには、日米の国立公園制度そのものの違いが現れている。アメリカでは国立公園の土地はすべて公園局のものであり、公園に入るには少額とはいえ入園料もいる。その代わり、国立公園局は公園内のすべてに対して責任をもち、現実になんか管理しているの

ある。前述した七百人を超えるスタッフには、警官や裁判官まで含まれており、実際、ヨセミテ・バレーのなかには裁判所や監獄まで設置されているのだ。また公園内を通る道路や橋の保守管理もすべて公園局の仕事である。したがって、ヨセミテに限らずアメリカの国立公園では、いっさいの管理と権限が公園局に集中していることになる。これに対して、地域指定制をとる日本では、国立公園といっても、それはたんにある地域を公園に指定しただけであり、その土地の所有者は、公園の管理者(環境庁)ではない。大部分の土地は林野庁や都道府県の所有であり、民有地のほうが広い国立公園も少なくない。いわば他人の土地で管理だけしようというのだから、管理が難しいのは当然である。一方、例えば環境庁のレンジャーは一人しかいなくても、公園内の森林は林野庁、河川は建設省、道路は建設省や運輸省というように、それぞれ数多くの職員を抱える省庁が、分担して管理を行っているのが日本の国立公園制度の特徴といえる。

メドレー氏はこのような日本の国立公園制度の利点は認めながらも、やはり、管理の主体であるべき環境庁が主導的立場をとりにくい現状には強い疑問をなげかけた。上高地では、現在、建設省によって、梓川の河川改修が進

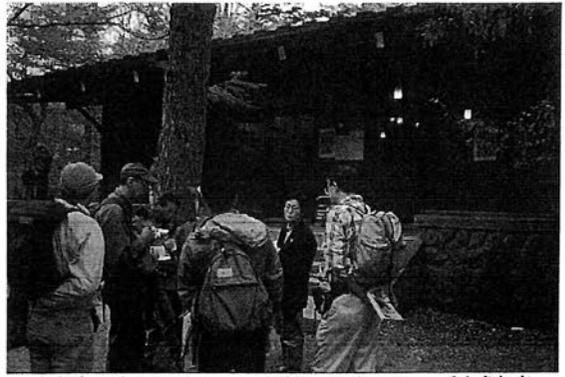
記念式典・晩餐会・フォーラム会場風景

①記念フォーラム会場、メインテーマは「JACは100周年に向けて何をなすべきか」 ②「ヨセミテからのメッセージ」で質問に答えるメドレー会長
③「私の山行・中高年登山の楽しみ」 ④「ヒマラヤ登山・その回顧と展望」



⑤フォーラム「ヨセミテからのメッセージ」に皇太子殿下ご夫妻がご出席になったのをはじめ、各会場とも多数の出席者でにぎわった
⑥恒例のJACグッズの販売コーナーも盛況 ⑦初の試みとして委員会や同好会の活動をパネルで展示、9委員会、11同好会が出展した
⑧会場に華やきを添えた二火会、山げら会、女性会員によるお抹茶サービス
⑨11名の新名誉会員が発表された、代表して挨拶する今井喜美子名誉会員 ⑩新入会員の紹介





上高地のビジターセンターで説明を聞くメドレー氏と参加者

められている。従来に比べれば自然に配慮した工法がとられている点は評価できるが、国立公園の河川管理はどうあるべきか、という基本的な方針ができていないために、結局は自然を壊す工事になってしまっているのが現状である。

この問題ひとつとってみても、公園内の自然管理について、環境庁が主導権をとれない日本の国立公園の管理の難しさがわかるであろう。

弁護士資格を持つメドレー氏は、日本の官僚制度の問題点をよく承知しておられ、現状の改善が困難であることは認められたが、それにしても、国立公園の管理に携わる省庁が互いに話し

合う機会をもち、より一元的な管理体制が取れるようなシステムを日本は早急につくるべきだとの提言をされた。上高地はこのような多くの問題を抱えているが、メドレー氏が今回の視察で高く評価されたことが二つある。一つは沢渡ですべての自家用車をとめるマイカー規制であり、もう一つは駐車場から奥には原則として車を入れず、徒歩利用だけに限っている管理状況である。ヨセミテではアメリカ人の車に対する執着に抵抗できず、上高地でいえば徳沢あたりまで、マイカーを無制限に入れてしまった苦い経験がある。無料のシャトルバスを運行したり、混雑時には車の入園制限をするなどの処置はとられているが、この点では上高地の規制に学ばなければならぬというのがメドレー氏の率直な感想である。老若男女、すべてが歩いて上高地の自然を楽しんでいる様子は、メドレー氏に強い印象を与えたい。これもヨセミテが学ぶべき点だと言われた。しかし、一方ヨセミテでは、施設の集中するバレーを離れると、その後ろには公園の面積の実に九七パーセントを占める広大なウイルダネス・エリア(原生的自然地域)が広がっている。そこには一軒の山小屋もなく、入山者はいっさいを背負って、テント生活をしなければならぬ。これに対して北

アルプスでは、上高地から離れても、そこには山小屋があり、整備された登山道がある。本来のウイルダネス・エリアがすでにほとんどなくなっているのが北アルプスの現状なのである。十月十四日、「ヨセミテからのメッセージ」と題して記念フォーラムが新高輪プリンスホテル「白雲」の間で開催された。フォーラムは大森弘一郎会員の司会で進められ、メイנסピーカーとしてメドレー氏、パネリストとして沼田真、岡島成行両会員、筆者はコーディネーターを務めた。これには会員百五十名、一般百名が参加した。そして皇太子殿下、雅子妃殿下もご臨席くださり、メドレー氏の講演と、引き続き行われたパネルディスカッションを熱心にお聞きくださった。これは私たち自然保護委員会の活動に対する大きな励みであり、今後、山岳会としても世界の山の自然保護に積極的に取り組むべき、との意志を強くした次第である。烏水が、シエラネバダから日本に持ち帰り、そして他のどこよりも日本山岳会に伝えたのは、ヨセミテを世界最初の国立公園にするために奮闘したジョン・ミューアの精神であった。日本山岳会の創立九十周年を祝うにあたり、私たちは、創立者たちの追い求めた高い理想を思い起こし、日本のそして世界の山岳の自然保護のため

に、私たちが何をなしうるかを今一度真剣に考えるべきであろう。

最後に、パネリストとしてご参加いただいた会員の沼田真博士、岡島成行氏、上高地と松本での催しをお手伝いくださった信濃支部と上高地自然史研究会の方々に厚くお礼申し上げます。

(自然保護委員・小野有五)

記念フォーラム・II

私の山行・ 中高年登山の楽しみ

フォーラム「私の山行・中高年登山の楽しみ」は、会員百五十名、一般二百五十名が参加して、広い会場「慶雲」の間を埋めつくし、午前十時半から開催された。村木潤次郎会長は「いま登山は若者から白髪群団に変わりつつある。愛好者の増加は喜ばしいことだが、反面登山者の増加は、山が荒らされるという現実もある。自然との関わり方も含めて、登山の楽しみ方を話し合っていたきたい」と挨拶。

司会の山口俊輔会員(前理事)よりパネリストの紹介があり、トップバッターとして横田明男会員(京都支部)

が、創立三十余年の「京都山の会」(会員数二百三十名)の歴史を振り返り、「尖鋭的なクラブが、中高年の増加によって組織の見直しを迫られ、幅広い山行に変化してきた」とその紆余曲折を語られた。また、干支にちなんだ山を登る会、年一回の「十二支会や、今

西錦司当会元会長が始められた「一等三角点研究会」の山の楽しみ方も紹介。次いで、高木泰夫会員(岐阜支部)

は、「大垣山岳協会」での長年の体験をもとに、北アルプス遭難事故について、「二十年前は二十歳〜三十歳代の遭難事故が八〇パーセントを占めていたが、この三年間は、中高年が八〇パーセントを占め、転落、滑落事故が多い。瞬発力が衰え、バランスを崩した時体勢を立て直せないからだ。杖の使用を勧めたい。中高年の特徴は、依頼心が強い。百名山目的など、ブランド指向が強い。自分の三十名山、百名山を目指してはどうだろう。また「頑固」もがんではないか」と指摘。

アララギ同人、田園歌人、結城哀草果の歌を引用「山と河がかくもうつくしくみゆるものか、齢は五十七歳」で結ぶ。共感することの多い助言だった。

資料提供者として神長幹雄会員(山と溪谷・編集長)は、十月号に掲載された統計を示しながら、「中高年の一般登山道での転落、滑落事故の原因は、

日程に余裕がない、事前のトレーニング不足、体力の衰えの認識がない、気持ちに余裕がないなどをあげ、十二月号では、どうして事故が起るか、未然に防げるかを特集予定である、と中高年問題に真っ正面から取り組む」と意欲を示す。

往時の名クライマーとして活躍した阿部和行会員(関西支部長)は、転職後は、「山スキー、パラグライダー、サイクリング、カヌーなどに挑戦。昨年は、ドナウ河の源流からウィーンまで川沿いのサイクリングを楽しんだ。また「紫岳会」では、未知なるものへのあくなき挑戦を目標にしている。困難をくぐり抜けなければ、真の楽しみが得られない」と、人を頼り、気持ちのみが先走る中高年に対しての、厳しい警告とも思える助言を呈した。

アドバイザーとして参加の医師堀井昌子会員(理事)は、健康チェックの重要性を強調し、「登山はだめと診断を下すドクターもいるが、体力に応じた登り方をすれば、可能な場合もある。ただ、ニトログリセリンや高血圧の薬を服用しながら、自慢気に登山をしている人がいるのは問題。膝、腰に弱点のある人は、杖を利用する。汗はむく

らいのウォーキング・一日四十分の効果や、無理のない山歩きを続けること、トータルトレーニングができる」

ときめ細かいアドバイス。

司会は南井英弘会員(理事)にバトインタッチ。当会同好会、アルパインスキークラブ(二十歳代〜八十歳代)の活動状況が高原三平会員から。次いで、深川安明会員からアルパインスケッチクラブ。最後に、袴田通孝会員が分割縦走の勧めなど「入谷山歩会」の山行を映像で紹介し、それぞれの中高年の山の楽しみ方が披露された。

参加者との質疑応答は、時間切れとなり、杖の使い方や道具類についてだけで終わったのは残念だった。十二時半終了。(会報編集委員・小倉董子)

記念フォーラム・III

ヒマラヤ登山・その回顧と展望

——マナスル初登頂から
マカルー東稜まで——

記念フォーラムのひとつ「ヒマラヤ登山・その回顧と展望 マナスル初登頂からマカルー東稜まで」は、午後一時半から会員三百名、一般百名の参加者のもと、「白雲」の間で開催された。

フォーラムは伊丹紹泰会員の司会によって始められ、宮下秀樹副会長の開会の挨拶のあと、出席者の紹介。コー

ディネーターは山と溪谷社の池田常道氏、パネリストは原真、鹿野勝彦、重廣恒夫、山本篤の各氏で、いずれ劣らぬヒマラヤ経験豊かな錚々たるメンバーである。ついで「このフォーラムはヒマラヤ登山の継続的実践を目指すもの」だとの趣旨説明があった。

フォーラムはビデオ放映のち関係者がコメントし、最後にパネリスト全員によるディスカッションという方法で行われた。予定時間を大幅に超過して四時間におよび、JACの海外登山の歴史の重みをひしひしと感じさせるものとなった。

ビデオは、一九五六年のマナスル初登頂に始まり、本年のマカルー東稜初登攀までの九本。いずれも七〜八分に圧縮されたエッセンスであるが、観客の胸を熱くさせるドラマがあった。

まず、一九五六年五月九日、戦後の日本に多くの夢と希望を与えてくれた初登頂、日本人初の八〇〇〇メートル峰「マナスルに立つ」、日本人初の一九七〇年の「エベレスト登頂」、同年世界第五位の高峰に挑んだ東海支部の六十五日におよぶ死闘「マカルー南東稜初登攀」の三本が上映され、見る人に深い感銘を与えた。

マナスルについて、十数年後マカルーに登った原真氏は当時は許可を得て日本を出ることのほうが大変難しかっ

た時代で、世相、外貨事情などの逸話を交えてその登山の意義を説明。またエベレストについても鹿野、重廣両氏がそれぞれコメントを行い、観客の理解に務めた。

ついでヒマラヤの八〇〇〇メートル峰が全部終わった七〇年代は、いよいよ縦走の時代となる。一九七六年のナンドデヴィ、一九八四年のカンチェンジュンガの初縦走の二本が上映された。

本峰と西峰の双耳峰をもつナンダデヴィはインドとの共同隊という形で行われ、カンチェンジュンガはハンググライダーによる高度世界記録がつけ加えられた。ともに八〇〇〇メートルの雲の上での縦走は凄まじい迫力だった。

この縦走に加わった鹿野氏はサポート隊の重要性、そして重廣氏は高所での長期滞在の困難性を力説した。

さらに映像は一九八〇年のチョモランマ北壁初登攀と一九八八年のチョモランマ／サガルマタ交差縦走の二本。前者は宇部隊員遭難の悲報を乗り越えての快挙、重廣氏はこの登山にJACに新しい血が入って活躍したという。

後者は世界初の試みとして三國友好、そして国境を越えての南北交差縦走の成功であり、五月五日の子供の日のT Vの実況放送に日本中が沸いた。

最後にごく最近の、未踏の最高峰だった一九九二年のナムチャバルワ初登

頂と今回のマカール東稜初登攀の二本。ナムチャバルワでは第一次隊は大西隊員を雪崩で失ったが、再挙して気象情報重視で見事に成功。マカール東稜はその長大な尾根を突破、重廣隊長の率いる登山隊はJACの九十周年記念に花を添えた。

以上でビデオはすべて終わり、総括のディスカッションに入った。今までの感想と百周年への提言もかねて約一時間にわたったが、パネリストから出された主な意見は次のとおりである。

・これからのヒマラヤ登山は大人数でやるべきではない。六人程度がよい。
・JAC入会については、もっと規制緩和が必要だし、会員数も十万人を目指すべきだ。

・今、登山家の質が退行してきているように思うが、他のスポーツの記録は伸びているのだから、登山も右方上りを目指すべきで、基本的には「自分の夢」をつくること、それにはたゆまぬ努力が必要だ。

・登山というものの一般への認知の必要性と、若い層にとっては体験は新鮮なものだから、JACはもっと多くの機会を与えて若手を育成してほしい。

・これからのヒマラヤの登山を素晴らしいものとしなければ、進歩から取り残される。
・多様化の時代だからいろいろあって

よいと思うが、よい登山をやるべきだ。ライブラリー(情報サービス)の充実が非常に大切になる。これはJACしかできない。

最後に、池田座長はJAC百周年に

丹沢・三ノ塔の記念山行に参加して

九十周年記念親睦山行は、式典の翌十月十五日、四つのコースから丹沢・三ノ塔岳に十一時三十分集合することになっていった。私は一番楽なヤビツ峠から登ることにして、マイカーでバスと東名を経由して秦野中井で高速を下り、ヤビツ峠に九時半に到着。ちょうどバスでこられた関西支部の入谷、近藤の両氏に会い、一緒に登ることにする。

県道を富士見橋へ、橋より少し林道を行き、登山道に入る。植林の中の道から灌木帯、ガラ場と鉄砲登りが続く。天気は快晴。足の速い人、遅い人、それぞれのペースで登っていく。下りてくる人もいる。息を弾ませながら、二ノ塔に着く。一気に眺望が開け、周辺の山々や下界の相模の町や村が見える。一息入れて三ノ塔へ、十一時三十分予定どおり到着。世話役の人がお酒とキムチ汁で迎えてくださる。早速ご馳走になる。

向けて「これから十年のヒマラヤ登山は先輩たちの業績というより精神に追いつけ」と結び、創立九十周年記念にふさわしい有意義なフォーラムの幕を開じた。(会報編集委員・小倉 厚)

山頂では本会だけでなく、大勢の登山者が昼食をとっている。受け付けで尋ねると、本日の参加予定者は百三十五名とのことである。三角点を探すと見つけたが大変損じており、三等の三の字のところが欠けてなくなっていた。九州支部、越後支部、東京の人など、以前お会いした人の顔が見えるが、皆それぞれ歓談しておられるので、挨拶は遠慮しておく。

昼食後、全員で記念撮影。一番重いザックを担いで登った人にピッケルが当たるそうで、一枚板の真ん中に△の石を置いて天秤にして、両端にザックを置いて測っていた。あとは全員で合唱、迷舞踊の披露と大賑わいである。京都支部の高島さんに会ったが、氏は大山を越えてきたので少し疲れたと言っておられた。十三時三十分解散。私はのんびりヤビツ峠から宮ヶ瀬へ。

(京都支部・小川九三雄)

新名誉会員紹介

大澤伊三郎(会員番号一〇五九)

明治三十一年八月十二日生まれ、九十七歳。明治四十五年七月、富士登山から始まり、南アルプス、関東山地、北アルプス方面山行、新コースの開拓紹介に意を注ぐ。山梨県山岳連盟会長、日本山岳会山梨支部長、日本山岳会評議員などを歴任。感想「哲学をもつこと。山を熱愛するも、その狂暴性を知り、対処に万全を期し、自然を犯すな」金山淳二(会員番号一六七)

明治四十二年六月二十二日生まれ、八十六歳。紹介者〓松方三郎・中屋健式。昭和七年三月、剣八ツ峰上半部初登攀ほか剣・槍・穂高など北アルプスの積雪期登山を重ねる。慶応義塾大学山岳部出身。感想「長生きしてよかったです。光栄です。山へ感謝しています」奥野正亥(会員番号一八一八)

明治四十四年九月二十二日生まれ、八十四歳。昭和十一年秋、金剛山集仙峰一二三〇メートル峰初登。以後、冠帽主峰、集仙峰中央稜第二峰初登、北胎山から南胎山などの山行を行う。京城市龍山中学校出身。

朝比奈英三(会員番号二〇七一)

大正三年十一月十六日生まれ、八十歳。昭和八年以来、北大山岳部員とし

て北海道の山々を登る。日高山脈美生岳(昭和十一年一月)、ルベツネ山(同十六年三月)、富良野岳、十勝岳、美瑛岳の冬季岩登りを含むバリエーションルートの開拓など。北海道大学山岳部出身。感想「伝統あるJACの名譽会員に推されて誠に光栄。小生のできることがあれば、と思っています」

風見武秀(会員番号二二〇五)

大正三年八月二十六日生まれ、八十一歳。昭和五年頃から北海道から屋久島まで国内の主な山々を登る。三十三年からヒマラヤ、チベット、ヨーロッパアルプス、南北アメリカ大陸など海外の登山、取材は九十回に及ぶ。感想「大変ありがたく、感激しております」藤平正夫(会員番号二二四七)

大正十三年九月二十三日生まれ、七十一歳。紹介者〓田部重治・赤間義健。北アルプス、主に剣、立山を登る。剣東大谷中俣積雪期第二登、夏期初登ほかAACRとしてアンナプルナ四峰(失敗)、チヨゴリザ(一九五八年)

初登頂。京都大学山岳部出身。日本山岳会前会長。感想「北海道在勤中の数年間会費未納のため、永年会員資格はなくなりましたが、通算すると有資格ということでしょうか。ともかく非力な名誉会員とは汗顔の至りです」

港 叶(会員番号二四五八)

大正六年十月九日生まれ、七十八歳。

紹介者〓佐野勇一・塚本繁松。昭和十三年、台湾新高山(玉山)。早大時代は穂高岳を中心に登山、昭和二十七年伯耆大山北壁の屏風岩の初登攀など。早稲田大学山岳部出身、第二代日本山岳会山陰支部長。感想「JAC本・支部の役員は若返ってください。若い会員に魅力ある会になるでしょう。山岳会もスポーツ団体です。自分の体力に合わせた山登り、山歩きをしましょう」

今井友之助(会員番号二九一一)

明治四十三年十一月二十九日生まれ、八十四歳。紹介者〓横有恒・谷口現吉。大正十三年甲府中学山岳部員として甲斐駒、富士山、金峰に登る。以降、南アルプス、北アルプスの山々を登り、とくに昭和五十七年に前穂・奥穂(冬)とくに昭和五十七年に前穂・奥穂(冬)

前穂北尾根、剣岳八ツ峰(春)、滝谷第二、第三尾根初登(冬)、第二尾根北山稜・第五尾根初登(三月)。昭和五十一年以降、ネパールなど海外トレッキングを重ねる。早稲田大学山岳部出身。感想「先年評議員のご指名を受けながら辞退しましたが、このたびはありがたく拝受します。父の四十七回忌の靈前に報告します」

今井喜美子(会員番号三〇一九)

明治三十八年六月六日生まれ、九十歳。紹介者〓中屋健式。大正十年から筑波山、富士山などに登り始め、昭和二年からは槍、穂高に登る。剣岳源治

郎尾根、八ツ峰や穂高のジャンダルム、飛騨尾根、滝谷は女性として初登攀。昭和四十六年からは海外の山へ。感想「私は九十歳、日本山岳会も九十周年。この年に名誉会員をいただき感激です」

牧野 衛(会員番号三一九四)

明治三十九年九月三十日生まれ、八十九歳。紹介者〓神谷恭、野口末延。大正十三年に赤城山黒槍に登ったのが登山の始め。以後、北海道から沖縄、離島の山に至るまで、今日まで千以上の山に登る。感想「名誉会員に推薦いただき光栄。健康に恵まれ、今日まで現役で山登りを続けてきたご褒美と思いい感謝します。これからもマイペースで山に登り続けたいと念願しています」

梅棹忠夫(会員番号三九六三)

大正九年六月十三日生まれ、七十五歳。紹介者〓今西錦司・桑原武夫。昭和十一年積雪期小蓮華岳、翌年の黒部源流を始め、北アルプス、八ヶ岳、大雪山石狩源流などに入る。また白頭山、大興安嶺など海外に探検旅行を重ねる。京都大学理学部卒業。感想「名誉会員の推薦は、世界各地で探検行を経験したことが考慮されたものでしょうか。イギリスならアルパインクラブと王立地理学会が並立していますが、日本山岳会は両者の性格を兼ね備えているものと考えます。その意味で名誉会員の推薦をありがたくお受けした次第です」

追悼

今西壽雄元会長を偲ぶ



斎藤惇生

一九八五年より四年間、日本山岳会の会長であった今西壽雄さんが、十一月十五日、入院先の関電病院で閉塞性黄疽のため亡くなられた。十一月下旬より大量の下血があり、輸血が行われた。主治医が驚くほど強靱な心肺機能で最後まで病氣と闘われた。各新聞はマナスルの初登頂者の死去を報じ、戦後の日本登山界への大きな貢献を讃えて悼んだ。

今西さんは一九一四年九月九日大阪に生まれ、市岡中学の時に登山部に入り、旧制浪速高校では鹿島槍に集中、積雪期の北壁の直登、夏期の荒沢南壁の二つの初登攀を完遂された。

一九四二年陸軍野砲隊入隊、旧満州で陣地構築にあたり、敗戦後はシベリ

ア抑留の辛酸を嘗められた。

一九五三年秋、京大(AACK)の初めてのヒマラヤ遠征アンナ・プルナIV隊の隊長として出馬、吹き荒れるジェット気流に阻まれて敗退した。

一九五六年、第三次マナスル隊に参加、その時四十一歳であった。常に先頭に立って活躍、第一次登頂隊員に選ばれ、サードのギャルツェンと五月九日頂上に立った。この時の登頂記は長く国語の教科書に採用され、映画「マナスルに立つ」とともに国民に感動をよんだ。

一九六九年より関西支部長、八五年には会長に就任された。八八年には、日、中、ネ三国合同チョモランマ/サガルマタ交差縦走の日本側総隊長として北側BCを訪れたあと北京にあって指揮をとられた。五月五日、交差縦走と同時にテレビ隊が頂上よりの放映に成功した。

今西さんはネパールを愛し、常に心にかけておられた。七〇年の大阪万博で予算の少ないネパール館を今西組で建設、九三年にはネパール王国大阪名誉総領事も引き受けられた。

今西さんは大柄で、ふだんは寡黙なほうであった。しかし側にいると頼り甲斐のある暖かさを感じる人であった。また一人歴史を作った人を失った。心からご冥福をお祈りする。

山の切手③

マカルー 相山之良



1970年6月11日ネパール発行。中央がマヘンドラ前国王50歳。左がマカルー。



1973年5月17日ネパール発行。マカルー。標高改定前の8476mとなっている。正面が南壁、西稜、西壁。

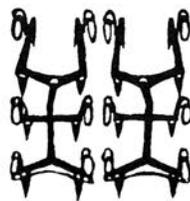
世界第五位の高峰マカルーが、ジャン・フランコを隊長とするフランス隊によって初登頂されたのは、一九五五年五月であった。ルートは、マカルー・ラから北西稜をたどるもので、さしたる事故もなく、三日間にわたり八名の登攀隊員全員とサーダーが登頂するという快挙だった。「幸せな家庭と同じで、幸せな登山は面白い話に欠ける」と語った隊長の言葉が喧伝されたが、フランス隊にとっては、一九五〇年人類最初の八〇〇メートル峰となったアンナプルナに次ぐ、二つ目のヒマラヤン・ジャイアンツの初登頂となった。

その後マカルーは、日本山岳会東海支部の南東稜からの第二登をはじめ、西稜、南壁、南西稜、西壁が次に登られ、唯一残されたルートがチベット側の東稜である。

初登頂から四十年目の本年、日本山岳会創立九十周年の記念事業として、この未踏の東稜初登攀が計画された。東稜は全長一三キロにおよぶ長大な尾根で、取り付きから七〇〇メートルまでは岩と氷のミックステッド壁をもち、さらに頂上まで険しい岩稜が続く、予想をはるかに越えた極めて困難なルートだった。しかも今年は記録的な大雪に見舞われ、登山日程が大幅に遅れて、当初計画された東稜の完登は断念せざるを得なかった。登山隊は、七二〇メートル付近から、チョモレンゾ側のマカルー・ラの東に広がる雪原にルートを変え、東稜上部を迂回する形で、五月二十一日第一次隊の四人が登頂に成功、翌二十二日にも第二次隊の四人が登頂し、チベット側からの新ルートが拓かれたのである。

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜七枚以内
でお願いします)



カット 中村あや

エコロジストへの道② 遊戯から真面目へ

静岡支部・西郷正郎

最近の山岳会運営上で問題視されるのは、社会の若年層の「登山離れ」と、中高年初心者層の「登山界への進出」である。これは本部、支部の別なく同様であると思う。

登山者の減少と増加のうち、中高年初心者の増加はその対応に困ることはない。前号で述べた「アルピニストからエコロジストへの変化」によって、いくらでも受入れ可能である。ある人はエコロジストになるのは嫌だといふかもしれないが、無謀な登山を強行して遭難事故を発生させるよりは、まだましである。

しかし若年層に広がっている「登山離れ」は、登山の将来に影響するだけ

に、慎重に考慮することが必要であろう。若者が「登山離れ」を起こした原因は他により魅力がある遊戯(スポーツ)の種類が多いことにある。登山をそれらの仲間に入れて考えてみるのも悪いことではないが、精神面での登山の魅力を強調してみることも必要であろう。

少し時代遅れの感があるが、第二次大戦前にオランダの学者ホイジンハが『ホモ・ルーデンス』(遊ぶ人)という本を書いて、「人間は遊ぶ動物である」という説を発表した。「遊戯」の反対語として「真面目」(まじめ)を設定して論を展開させている。

(エルネストの訳語を真面目というものは日本語としてしっくりこないところがあるが、今まで長く使われてきているのでそれに従うことにする。)

この考え方で登山をみると、登山は「遊戯」であり、スポーツ、競技、趣

味と同類ということになる。若い世代が登山をスポーツと解し、理屈、思想というものに一切触れないで、肉体的感覺的行動を中心にして楽しむことは、現代的であるとも思える。しかし遊戯が遊戯だけで終わってしまうとあっては、何で人間として生まれたのか判らなくなる。

「真面目」とは「人間が人間らしく生活し生きる」ことを意味する。登山者を一個の人間として考えるとき、若者である時期は、ただ登山に打ち込み他を顧みる余裕のない時期、中年以降は体力の衰えを自覚し、社会生活中心に戻る時期、ホイジンハ言うところの「真面目」の世界である。この二つの時期を経ることによって、登山家は生涯を完了し、心安らかに死を迎えるのではないかと思う。人間の一生には遊戯から始って真面目に終わる流れがある。

その両者がある時点で入れ替わる時、それを本人が自覚する、しないは別にして、その契機に作用するものがあるはずである。私はそれを「自然」と考え、心がそこに回帰するのだと思う。

この人間の一生を完成させるメカニズムに若い人々の関心を導いていくならば、彼らの「登山嫌い」は解消され、登山の世界へ興味も生まれ、若い登山家の数も増えていくに違いない。

中高年層の登山者の増加、若年層の

減少という二つの登山界の問題を解決する鍵は、期せずして「自然」への関心を一層強化することにある、との結論が出る。これによって、エコロジと称される「自然」への思考を無限度に広げようとする人間の営みによって、登山界の難問は二つとも解決できると思うのである。

アルピニストからエコロジストへの変身は、登山の未来への発展に大きな進路を開いていると結論するのである。

元老と熟年会員 北奥千丈岳に登る

松岡 繁

私たち中高年の本会会員は、梅雨入り前の六月四、五日に、奥秩父の最高峰・北奥千丈岳と国師岳に登頂した。

八十三歳の織内名誉会員に同行した五人の合計年齢が三百三十五歳、まさに快挙で、意義ある充実した登山だった。

塩山駅前広場で首都圏組と静岡県組(照内豊会員、佐野洋二会員)が合流した。十六時十分に塩山を出発し、安全運転で走る。海拔一五二六メートルの焼山峠を通り、奥秩父の秘境・柳平の金峰山荘に十七時十分到着した。夕食は牛肉、高原野菜、サラダ、ライス付きのバーベキュー料理だった。実に

うまい。最高の美酒である「高砂」大吟醸を飲み、静かな牧場の宿で心地よく就寝した。

翌朝は午前六時に起床、八時五分に山荘を出発した。峰越林道は凸凹の多い砂利道で、自家用車をいたわって走る。約一時間で海拔二二六〇メートルの大弛峠に至る。ここに車をデポした。

小さな残雪がある。新緑の落葉松と桃色の石楠花の美しさに歓喜、夢の庭園で休憩する。ここから前国師岳までの、緩い山道は大きな露岩と、木製梯子で歩きにくい。所々に小雪溪、雪田あり。両側は石楠花の群落が見事だ。開花はまだである。シラベや岳樺も多くなり、私たちを励ましてくれた。

五人が汗ばむ頃に、展望の北奥千丈岳に到達した。十一時二十五分に全員が登頂。頂上付近は巨岩が多く、這松帯である。高山帯の植物生態系に感動し、握手をして喜ぶ。近くには金峰山がよく見えた。ときどき雲上遙かに、南アルプスの雪化粧した白根、北岳も眺望できた。もちろん、奥秩父の名高い山々も眺められて、理想郷の景観であった。民宿で用意してくれた握り飯と、大先輩が持参した湯豆腐とビールで昼食、格別に美味かった。ここ奥秩父の最高峰では、空き缶、タバコの吸殻などのゴミを拾い集めてビニール袋に入れ、持ち帰る。美化運動をした

後は気分爽快!!

大休憩をした後、三つなぎ平に下る。この分岐点から、心地よい登りの山道をたどり、海拔二五九一メートルの国師岳にも登頂した。高曇りの天気も晴れて、周辺の山々が展望できた。自然の景色に見とれ、喜びのため息と涙が出るようなパノラマであった。

十三時三十分前国師岳を後にする。再び三つなぎ平から前国師岳を経て、下り道を慎重に下りた。十五時十分前大弛峠に着いた。

かくして元老の名誉会員と、中高年三人の本会員と女性一人(植村葉子)は思い出多い奥秩父登山を完了した。キバナ石楠花、コケモモ群落保護指定区域の大弛峠から一二三キロ走行して、八王子駅で解散し帰宅した。

カザフスタン・キルギスタンのトレッキング

中垣淑子

七月から八月にかけて、中央アジアのカザフスタン、キルギスタンの三〇〇メートル級の山をトレッキングした。カザフスタンからキルギスタンへのサリ・ブラク峠(三二七八メートル)越えは途中に三つの湖がある美しいコースだ。ガイドのジミトリー(二十七



左から、マヤコフスキー岳、オルジョニキツェ岳

歳)とアシスタントのユーリ(四十歳)は湖で泳いだり、沢で水浴をしてはしゃいでいた。ロシア人は水浴が大好きで、気温、水温に関係なく冷たい沢に平気で入っている。この季節は至る所お花畑で、まるで天上の楽園のようだ。

遊牧民のテントで、自家製のパンや馬乳酒をご馳走になったりした。テント四泊のトレッキングだった。

キルギスタンには温泉もある。山中の保養地へはテント二泊で出かけた。アラシヤン川を溯ると二五二五メートルの高さのところに数軒の集落があり、湯治場がある。硫黄の匂いのする透明な湯で浴槽は男女別であり、ジミトリーとユーリは出たり入ったり、一時間も楽しんでいた。このあたりの山には

マルコポーロの羊がいるという話をセミョーノフの「天山紀行」で知っていたので地元ガイドに尋ねると、今朝も稜線に数匹いるのを見たとか、アメリカ人がヘリコプターから二十匹もマルコポーロ羊を射ったとか話す。しかし下山して、地元の名産狩猟家ネストロフ・ニコライ・アンドレヴィッチの小さな私設博物館に寄ったとき、彼の娘の夫でやはり優れた狩猟家であるコミサロフはマルコポーロ羊はいない、誰も見た人がいないのだと言った。

カザフスタンのアルマティに戻ってからは日帰りのトレッキング、山小屋泊りのトレッキングを楽しんだ。有名なスケートリンク、メデオ周辺の日帰りトレッキングは一日に一五〇メートルを登り下りする。お花畑は美しいが、急登の連続で飲まず食わず休まずには参ってしまった。頂上でようやくパンとソーセージにありついたが、ガイドのアレキサンドル(五十五歳)は水なしで食べている。彼はヤカントとコッヘルを持っているが、それは沢へ下りてからお茶を沸かしたりスープを作ったりするためのもので、行動中は水筒を持たないのだった。

ブナ立尾根なみの登り下りには二日間閉口して、次は山小屋泊りにしたいと言った。メデオの上、二四六〇メートル地点にある個人の山小屋に泊ま

り氷河まで行くというもので、岩登りの人たちのベースキャンプよりさらに登って三四二〇メートル地点、周囲を四〇〇メートル級の雪山、岩山に囲まれた氷河湖まで往復。翌日は科学アカデミーが氷河の観測をしている観測所の少し上の、美しい氷河湖のある三二八〇メートル地点まで登った。トゥクスー氷河を囲むようにマラジョジョニイ(四二〇〇メートル)、オルジョニキツゼ(四四四〇メートル)、マヤコフスキー(四二五〇メートル)など四〇〇メートルの岩と雪の山が林立している様は壮観だった。これらの山を四、五日かけて縦走すると楽しいとアレキサンドルは言う。

アルマティから車で三時間、イリ川の側には岩登り競技に使われる岩場がある。実は岩場が目的ではなく、青銅器時代に描かれた動物の絵が目的でこれまたテント持参で出かけた。絵のほとんどは博物館用に取り去られているが、それでも牛、山羊、犬、蛇など狩猟の絵が残されていた。かつてはシルクロードのオアシスだったこのタンガルオアシスには、当時をしのばせる仏陀の絵やオムマニメフムと書かれた文字もある。一方、岩絵もシルクロードも関係なくラジオを鳴らしながらイリ川で泳いでいる若者たちのテントも多かった。

海外の山

山岳旅行の覚悟

江本嘉伸

ネパール・ヒマラヤで十一月十日前後に発生した大量降雪、豪雨による地元民とトレッカーの雪崩、土砂崩れ遭難は、神々の座をのぞむ場に立ちたい、という山好きの人々の願いが、危険と紙一重であることをまざまざと見せつけた。

十一月十八日現在、死者は六十二人。国別の内訳はネパール人四十人、日本人十六人、カナダ三人、英国、アイルランド、ドイツ各一人となっている。また、ヘリコプターで救出された者は五百四十一人にのぼった。

回の事故はそれを上回る史上最大規模の遭難となった。

それにしても遭難というのは予想しがたい。ゴークョ峰山麓の、普段のどかな風景からは、あれほどの降雪があるとは、考えもしなかっただろう。事故の一報を聞いて、よほど急な斜面からの雪崩を思ったが、小屋の上部はせいぜい二五度程度の斜面で、急峻というほどではない。それだけ短時間に多量の雪がたまり、一気に落ちた、ということなのだろう。

ひとつには、ツアーを企画する山岳旅行専門業界はトレッキングの安全性をあまり強調し過ぎないことだ。競争の原理もあって、ヘリコプターを使った効率的な旅なども今後ふえるだろうが、どんなに条件が改善されても、電話ひとつで日程を変えられる国内旅行とは本質的に違う場所なのだ。そういうことを含めて「山岳旅行」という新たな分野の研究が、もっと積極的になされていだろう。

雪崩による犠牲は日本人とネパール人だけで、カナダ人ら六人はマナン地区の豪雨による土砂崩れに巻き込まれての遭難、と伝えられた。

山での大遭難としては、一九九〇年七月十三日、ソ連(当時)のパミール・キャンプC2付近で大雪崩が各国隊のテント群を襲い、五か国四十三人もの登山家が一瞬にして呑み込まれた事故が思い出されるが、今回の事故はそれを上回る史上最大規模の遭難となった。

十月から五月までは、トレッキング・シーズン。今回の事故発生と同時期には他にもヒマラヤ山系のあちこちで、立ち往生する外国人トレッカーたちがいた。その中で雪崩の現場に居合わせた人たちは不運というしかないが、今回の大遭難で「トレッキング安全」神話は、見事に粉砕されてしまった。そこから何を学

びとるか。

ひとつには、ツアーを企画する山岳旅行専門業界はトレッキングの安全性をあまり強調し過ぎないことだ。競争の原理もあって、ヘリコプターを使った効率的な旅なども今後ふえるだろうが、どんなに条件が改善されても、電話ひとつで日程を変えられる国内旅行とは本質的に違う場所なのだ。そういうことを含めて「山岳旅行」という新たな分野の研究が、もっと積極的になされていだろう。

旅の主役となったが、できればそれを他人まかせの「お仕着せツアー」とは全く別なジャンルに育て上げられないものか。

そのための第一歩は、自然は常に危険と隣り合わせだということをおぼたためて考え、そういう場所に行くのだ、という覚悟をしっかりと持つことではないか、と思う。

報告

REPORT

探索山行

奥美濃大日ヶ岳

科学委員会・岐阜支部

九月三十日、岐阜羽島駅で岐阜支部の世話人の皆さんと合流、九時四十五分の予定よりやや遅れて、今夜の宿ホテル・ホワイトキャッスルの送迎バスで出発した。

県庁前で岐阜支部からの参加者を拾うと、早速、岐阜支部高木幹事の司会で高木岐阜支部長の挨拶、今回の講師大内岐阜大学名誉教授の軽妙な挨拶の後、付近の歴史などの解説を聞きながら長良川に沿って北上。白鳥町で昼食後、長滝神社を訪れ、神職・若宮多聞氏の白山講・長滝講の話の伺うとも、若宮氏宅若宮修古館の展示品を拝見した。白山は加賀の山とばかり思っていたが、かつては美濃側が主たる登山道だった由。

ひとまずホテルの部屋に落ち着いて十六時から大内講師専門の、山林経営学研究を背景にした講演会「ヨーロッパアルプス登山基地山村の変遷」フ

ンスの事例から」が行われた。

アルプス登山基地山村でも過疎化が進み、山村の崩壊を防ぐためのスキーリゾート基地建設が進められた。当初第一世代は、例えば越後湯沢のように、いわゆるリゾートマンションのような建物が立ち並んだ。

しかし山村の景観としての牧草地・森林が管理される必要性が認識された第二世代、ついで風景が保たれ、登山リゾート基地の役割と同時に、山村の文化が継承されるような第三世代の登山基地へと変遷し、さらに村の生活とリゾート生活が直結することを目指して、第一世代の第四世代への再生が行われた。現在では、伝統の山村文化の近代的再生が図られ、農業を基礎に自立した本物志向の第五世代の登山基地造りが進められている、という内容であった。

引き続き懇親会では、郡上踊りが披露され、また踊りの指導が行われ、宴会場は一大舞踊場となった。

翌十月一日七時十分、小雨の中をバスは大日ヶ岳スキー場に向かう。我々の登山のためにリフトが運行された



大日ヶ岳山頂で恒例の万歳!! 乾杯

白山、北東に乗鞍、さらに東方間近に御嶽と四囲の山々の眺望に恵まれ、晴れていればさぞかしと思われた。

記念撮影をすませ、やや下ったところで昼食(十時四十分)十一時十五分ここで大内講師から大日ヶ岳の植生について話を聞く。上から、灌木帯、針葉樹林帯、ブナ林と続き、植生がよく発達している山とのことである。

下るにつれてブナ林となり、ブナの大木に囲まれた「いっぶく平」で小休止の後、十三時三十五分、蛭ヶ野に下った。ここで解散となり、地元自家用車組と分かれてバスで岐阜羽島に向かった。

今回の山行にあたって、宿やバスの手配、山の下見と当日の案内、その他山行の運営と一切のお世話をくださった岐阜支部の皆さんに厚くお礼申し上げます。

参加者・一般十三名、岐阜支部三十名、科学委員会十名、山行参加者五十一名。(北野忠彦)

三水会・創立二十周年記念

お祝いの集い

三水会

十月十九日(木)、神楽坂の東京都教育会館において、村木JAC会長をはじめ



105名が出席して三水会の創立20周年を盛大に祝った

め百五名が出席して、創立二十周年記念の会が開かれた。

二月に創立記念実行委員二十二名が決まり、片岡博さんが実行委員長に就任。十五周年記念を基にそれぞれの分担を決め、日時、会場なども決定し、月に一回の会合を開くことにした。会場は前会同様、東京都教育会館、会費は一万円、記念品はバンダナ、記念誌の刊行と準備は着々と進められた。

準備が進行中の七月、発起人の一人である中保さんの訃報に接したが、病床より実行委員の高田さんに「全面的に任せる」と遺言が伝えられた。

何回かの会合の結果、事業はだんだんと具体化し、記念山行を十月二十二日、天覧山に決定。

記念集会の当日、各委員は四時に会場に集合、会場の準備を完了した。そして発起人の坂倉、錦織、西丸の各氏と斉藤(健)氏への感謝状の授与など、集会は盛大に催された。(樋口公臣)

第六回赤シャツの集い

四尾連湖・水明荘

土曜会

今回は、第一回と同じ四尾連湖となった。出発の二日前、かの地に詳しい友人と杯を傾けた際、宗教と毒ガスの結びつきが司直の手で説明され始めてから一月、「蛾ヶ岳は上九一色村に程近いからサリンでも隠されているのではないか」と揶揄された。

四月二十二日昼前、八王子始発の列車に乗り、程なく裏高尾にさしかかると、低く垂れこめた雲の下でも鮮やかな色を放つ新緑に目を奪われ、それまで頭の隅に留まっていた友人の言葉が消え去った。やがて小仏峠を潜って間

もなく、声をかけられた。見ると幹事の石崎さんであった。全員が先の列車と聞いていたので訝ると、内藤さんも一緒の由、前の車両に移ることにした。

甲府では、身延線の車両がすでに入線していた。先の車両で坂倉さんの姿を確認して乗り込むと、第二回の清水雲天で見知ったエーデルワイスの淑女たちが華やいだ雰囲気醸し出していた。今回は今井喜美子先輩九十歳祝賀の会を併せ行うとのことであった。

市川本町駅に二時半、小型バスとランドクルーザーが迎えにきた。それに分乗して、藤田集落から登りにかかる頃、富士川の対岸、南アルプスの前衛の山は中腹まで雲がかかり、そのあたりは降っている模様であった。程なく見えた蛾ヶ岳から大畠山の稜線にも、今にも降り出しそうな暗いガスがところどころにかかっていた。

水明荘に三時頃到着し、湖岸に張り出したテラスで三十分ほど休憩した後、エーデルワイス関係者は対岸での祝賀会に出かけ、他は個々に散策した。

第一回るときは、宿に到着したとき雨が降り出したため、早速食堂でビール、各部屋に上がって酒盛りになった。

それで夕食時の懇親会は、始まる前から声高な談笑が大広間に満ちていた。対照的に今回は、整然とした儀式のような懇親会であった。

翌日の天候を気にしながら床に就いた夜半から、ときどき建物を揺るがすような突風が起り、断続的に続いた。二十三日朝、案じたとおり、雲は飛び、雲の切れ間から漏れる陽光が驟雨を照らすような空模様であった。

湖岸の散歩に出かけると、第一回るとき錦の屏風のように見えた大畠山に続く稜線は、新緑未だしであった。宿の対岸あたりから湖岸を離れ、小高い丘にある子安神社を訪れた。これは安産の神、拜殿で敬虔に手を合わせていたエーデルワイスの淑女たちの姿が印象に残った。その社から湖を懐くような丘の道を、木洩れ日と驟雨を交互に浴びながら、ゆっくり散策した。

昼食は野外でバーベキューを予定していたが、天候故、宿の部屋を借りて行った。その席で坂倉さん持参の金粉入り銘酒が披露され、再度の祝宴となった。昼食後、予定より早く十二時半にバスで出発、帰途についた。参加者十九名。(井上公利)

次代に残そう美しい山と溪

書籍受入報告 (1995年10月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入
徳仁親王	テムズとともに：英国の2年間 (学習院教養新書No.7)	218pp/18cm	学習院総務部広報課	1993	村木潤次郎氏寄贈
廣瀬誠・清水巖	立山：山と信仰	245pp/19cm	佼成出版社	1995	著者寄贈
柳原修一	北アルプスやまびと物語	271pp/19cm	東京新聞出版局	1995	出版社寄贈
山口裕一	人はなぜ道に迷うか (ちくまプリマーブックスNo.90)	202pp/19cm	筑摩書房	1995	著者寄贈
キャロリン・ガン	探検家の野外料理	196pp/22cm	山海堂	1995	出版社寄贈
「自然人」編集委員会(編)	いしかわ人は自然人：江沼三山 (大日山・富士写ヶ岳・鞍掛山) (季刊誌「いしかわ人は自然人」No.33, Autumn, 1995)	63pp/26cm	橋本確文堂企画出版室	1995	太田義一氏寄贈
飯山達雄 (編)	北朝鮮の山 (写真集)	174pp/30cm	国書刊行会	1995	浜田さかえ氏寄贈
日本山岳会三水会(編)	20周年を迎えて	43pp/21cm	日本山岳会三水会	1995	発行者寄贈
玉村和彦	チベット・聖山・巡礼者：カイラスと通い婚の村 (現代教養文庫 No.1569)	271pp/15cm	社会思想社	1995	著者寄贈
玉村和彦	チベットの旅楽書帖 (画文集)：ナムナニ峰登頂10周年記念	19 × 27cm	玉村和彦(私家版)	1995	著者寄贈
谷本蟬丸	50歳からまた始めた山登り：2人で楽しく人生を歩むために	207pp/20cm	新風書房	1995	出版社寄贈
T.Palmer & W.Neill	Yosemite : The Promise of Wildness	120pp/31cm	Yosemite Association	1994	発行者寄贈
Toshiro Haruta (ed.)	Moths of Nepal (Part1-4) / Tinea Vol. 13-14 (計4冊)	26cm	The Japan Heterocerist's Society	1992-1995	編者寄贈

会務報告

十月理事会

日時 十月十二日 十八時三十五分～
二十時三十分

場所 日本山岳会会議室

出席者 村木会長、宮下、中村各副
会長、大屋、吉永、中川、大谷、松浦、
伊藤、南井、堀井、渡邊、溝口、山本、
田邊、宇田川、熊崎各理事、川崎、石
橋各監事、小倉、大倉、村井、大森、
神崎各常任評議員

「委任」 斎藤副会長、水野、大蔵各理
事、重廣常任評議員

【審議事項】

(一) 平成七年度秩父宮記念学術賞推薦
について 大屋

次の二件提出されたが②については
検討する時間がなく見送られた。した
がって科学委員会で検討済みの①が推
薦された。

①「日本アルプス及び世界の諸山地に
おける氷河地形の研究」有井琢磨会員
(九九二四)

②「ネパールの蛾の調査研究」春田俊
郎会員(四四八五) 承認

(二) 「山」九月号掲載記事の一部転載
許可について 大屋

新ハイキングクラブ城北支部報へ山
口力男会員(一〇七八二)より山と医
療コラム欄、大森薫雄会員の「杖をつ
いて歩こう」の記事転載要請がなされ
た。 承認

(三) 名義後援について 大屋

十月二十六日「パトリック・モロー
さんを囲む会」開催に対し(懶キユー・
フォト・インターナショナルより後援
の要請がなされた。 承認

(四) 平成七・八年度海外登山基金委員
会 宮下副会長

委員長 宮下 秀樹(新任)
中村 純二(留任) 副会長

大屋 梯二(新任) 総務
吉永 英明(新任) 財務

渡邊 雄二(留任) 高所
重廣 恒夫(留任)

伊丹 紹泰(留任)
三谷統一郎(留任)

増山 茂(新任)
神長 幹雄(新任)

山本 宗彦(新任)
村井 龍一

事務局 本年度助成金は百万円。「山」十月
号に助成応募要項を掲載する。 承認

(五) 上高地山岳研究所、発電機の設置
について 溝口
自然エネルギー利用のデモンストレ

ーションとして電力三社の援助も認め
られ、一年間の猶予期間をもって実施
していく。 承認

(六) 各委員会上期予算執行実績につい
て 吉永

平成七年度予算執行実績は別紙のと
おりであるが、執行については各委員
会担当理事も適正な執行に努められる
よう要望する。 承認

(七) 九十周年合同募金現況(十月十二
日現在) 承認

会員募金 延べ千五百二十五名
二千七十三万四千六百三円

企業募金 百二十九社(団体)
二千四百九十五万円 承認

【委員会報告】

●指導委員会 ①小川山岩登り研修会
について。②山岳レスキュー対策委員
会冬山シンポジウム・雪崩対策研究会
の予定。

●青年部 ①日本山岳会青年部K2登
山隊一九九六の資金の一部としてテレ
ホンカードの発売。②K2登山にあわ
せて支援トレーニング計画のパンフレ
ットを式典当日配布する。③十一月一
日(休)例会、千葉大学ナンガパルバット
登山報告会。④十一月十一日(出)「山岳
部監督会議」開催。

●科学委員会 九月三十日～十月一日
「探索山行」長良川源流大日ヶ岳(一
七〇九メートル)「奥美濃の植物」探

索、参加者五十三名。高木支部長以下
岐阜支部の支援で、成功裡に挙行でき
た。(詳細は後日「山」に掲載予定)

●山研・資料委員会 ①山研は十月二
十一～二十二日閉所式を行うが十月三
十一日まで宿泊は可能。管理人も在住。
②パソコン通信について。

●学生部 十一月十九日(日)マラソン大
会(皇居周辺)を開催。

●図書委員会 十月二十六日、第三回
「山を語る」講師・塩沢久仙氏(芦安
村宮広河原山荘)。

●集會委員会 ①九月三十日～十月一
日「きのこ山行」博士山・高郷温泉

味の技、心でつくる



むさし坊 日比谷店
(東宝ツインタワービル9F)
千代田区有楽町1-5-2 ☎03-3504-1905
むさし坊 麹町店
(有楽町線麹町駅隣)
千代田区麹町4-2-6 ☎03-3230-2313
むさし坊 神田西口店
(神田西口通り商店街)
千代田区内神田2-9-9 ☎03-3252-5015
友膳ゆうぜん
(半蔵門線半蔵門駅3分)
千代田区平河町1-3-12 ☎03-3288-5891

むさし坊 番町店 (日本TV通り五番町交差点角)
千代田区六番町4 ☎03-3234-3357

山と医療

登山の前には
痛みのチェックを

滝 和美

“痛み”は身体故障の警告信号であり、日常動作では我慢できるものであっても、長期登山の前には原因チェックが必要です。痛みの起こる箇所、安静時の痛みか運動時の痛みか、痛みは瞬間的か持続的か、などをチェックしておくこと診察・診断が容易となります。最も多い下肢の痛みは関節周辺と筋肉部分とに大きく分けられます。左右差、運動時の痛みの増強、運動方向による痛みの増強、腫張や発赤の随伴などに気をつけ、専門医から受診してください。

歯痛は齲歯(むし歯)の治療、未治療を問わず、低圧下ではその痛みが増悪します。長期登山の前には歯科受診

が必要です。日常的に頭痛を経験される方は、他に無症状でも原因の追及とともに主治医と相談し、自分に効く鎮痛剤を探しておくべきです。

中高年者では近視の方はもちろん、遠視検査を受け、適正な眼鏡を早めに使用するべきです。

筋肉質の人での胸痛は自然気胸が多く、最近ではCT撮影で容易に診断がつくので、覚えのある人は早めに治療しておきましょう。腹部の痛みは種々ですが、胃潰瘍、十二指腸潰瘍、慢性胃炎、胆石症、腎結石、慢性虫垂炎などが問題となります。痛みの箇所、発熱、背部痛合併、嘔気、嘔吐の有無などがチェックポイントとなります。低圧、低酸素、疲労でいずれも増悪する疾患であり、登山前の治療が必須です。

女性の生理痛もしばしば行動制限を強いられます。

他の人に迷惑をかけないためにも、病気や障害の窓口“痛み”を専門医に相談され、快適な登山のできる身体にして出発してください。

鏡山。山行は高郷村、五十嵐支部長以下越後支部の支援でなごやかな交流ができた。②十月十五日(日)、九十周年記念親睦山行(丹沢・三ノ塔)申し込み者現在百名。

●総務委員会 十一月十八日(土)、秋の「山」の九十周年特集号について。新入会員オリエンテーションを開催。●九十周年記念式典について。記念晩餐会について。・記念フォーラム全般について。・ヨセミテ、メドレー会長のスケジュールについて。・会報

INFORMATION



◆九十周年記念式典・東海ブロック

一、記念晩餐会

日時 一月二十日(土) 十六時三十分～二十時三十分(十六時受付開始)

会場 名古屋都ホテル

名古屋市中村区名駅四一九一

○(名古屋駅前)

TEL・〇五二一五七一三二二一

講演会「エベレストの南と北」

講師・湯浅道男・神崎忠男両氏

式典及び記念コンサート

演奏・東海学園オーケストラ

懇親会 十八時三十分より

会費 一万円

二、記念山行

期日 一月二十一日(日)

場所 誕生山(五〇メートル)美濃市

集合 九時 JR岐阜駅前

昼食 各自持参・頂上にてトン汁用意

会費 無料

申込 ハガキで一月十日までに左記へ、

宿泊希望者は「宿泊希望」と記入のこと、一万円以下のホテルを紹介します。

〒四六〇 名古屋市中区富士見

町八八 OMCビル

日本山岳会東海支部事務局

◆ゴラパニ石楠花調査へのお誘い

自然保護委員会大森弘一郎

ダウラギリの見える峠ゴラパニに広がる石楠花の林の価値を調べようと、

「山の自然学講座」のメンバーが来年三月に左記の日程で出かけます。興味をお持ちの方は至急講座への入会をお勧めします。入会用紙はファックスで

(〇四五―八三三―八五〇五・大森)

ご請求ください。

一九九六年三月十六日 成田発十時三十分 TG六四―バンコク

十五時三十分着

十七日 バンコク発十時五十五分 T

G三二―カトマンズ十二時

五十五分着

十八日 カトマンズポカラゴラパ

ニ(定期航空とヘリコプター)

十九日～二十三日 ゴラパニで調査

(山小屋泊)

二十四日 ゴラパニテイルケドング

(バッテリー泊)

二十五日 ビレタンティポカラ

二十六日 ポカラカトマンズ

創立90周年記念事業募金応募状況

(11月6日現在)

(累計1,536人 4,174口 20,869,603円)

- 10口 (50,000円) 川津鐵禮
- 4口 (20,000円) 二塚謙三
- 2口 (10,000円) 山口政一 (計4口) 片岡濱子
関孝治 (計4口) 村井龍一
- 1口 (5,000円) 前嶋信 (計2口) 藁科光雄
斎藤晋 佐山邦彦 片岡次雄

二十七日 カトマンス発十三時五十分 T G三二二バンコク十八時十五分着

二十八日 バンコク発十一時十五分 T G六四〇一成田十九時着 費用 約二十二万円(ヘリコプターは講座で負担。ただし安宿と山小屋使用) *カトマンスで解散後自由行動可。 (帰りの航空券は延長可能です) *航空券予約のため、参加を考慮の方は「すぐ」お知らせください。今年中は無償でキャンセル可能です。

◆九十周年記念ビデオ実費頒布のお知らせ

事務局 一、「マカルー東稜・未知への挑戦」日本山岳会創立九十周年記念事業として、登頂に成功したマカルー登山隊の記録ビデオができ上がりました

頒布価格 三千元(郵送料別途六百元) 申込 ハガキかFAXで事務局へ。

二、「人を讀え 山を究める」十月十四日に開催された記念式典に先立ち上映された記念映像です。

山岳会の創立からアルピニズムの誕生、戦前の海外遠征、戦後はマナスルからエベレスト、そしてカンチェンジュंगा、マカルーまでの十年、貴重な海外登山の記録を始め、委員会の活動、支部活動などをダイジェストに捉えながら山岳会の現在の姿を描いています。

制作・九十周年記念事業委員会 構成・演出 羽田 栄治 制作協力・東京福原フィルムス

頒布価格 二千元(郵送料別途六百元) 申込 ハガキに住所、氏名、会員番号明記の上、平成八年二月末日までに事務局へ。ビデオと振替用紙を送ります。

◆アイスクライミング研究会 指導委員会 学生部・青年部共催

日時 平成八年二月四日(出)五日(回) 場所 ハケ岳赤岳ジョウゴ沢周辺

目的 ダブルアックスクライミングの技術及び氷壁での確保技術修得

対象 積雪期登山経験二年以上かつ岩登り技術が中級以上の方

■会員異動

物故 佐藤光 (三九六七) 7・10・3
今村正二 (一七五八) 7・10・9
岩本美津雄 (九七七四) 7・10・14

30日	資料委員会	10月来室者769名
28日	山の自然学研究会	
26日	図書委員会 集会委員会	
25日	財務委員会 学生部 青年部	
24日	山の自然学研究会	
20日	自然保護委員会	
19日	科学委員会	
18日	遭難対策委員会 学生部	
17日	二火会 フィルムビデオ委員会	
16日	総務委員会 アルパインスキークラブ	
15日	自然保護委員会(全国集会)	
12日	理事会 集会委員会 学生部	
11日	常務理事会	
7日	式典委員会	
6日	フォトビデオクラブ	
5日	図書委員会 学生部 式典委員会	
4日	自然学研究会	
3日	ケッチクラブ	
2日	式典委員会 山岳編集委員会	
10月	自然保護委員会 アルパインス	
終身会員	柿原謙一 (一七五二) 7・10・31	
	西本正行 (七九三二) 7・10・16	
	田村哲朗 (九六八八) 7・10・1	

ルーム日誌

◆編集後記◆

●一九九五年は本会の創立九十周年記念行事に明け暮れた年でした。去る十月十四日、東京で行われた記念式典においてそのクライマックスに達しました。本号はその模様をできるだけ詳しく全国の会員の皆様にお伝えするよう、特集したものです。

●一月号から本文の一段が十六字詰め・三十二行(従来は十七字詰め・三十一行)になります。原稿もそのように書いてくださると助かります。

●編集後記のスペースは毎号開けておくのですが、いつも初稿時の割り込み原稿(お知らせ)に席を譲ってしまうことが多いです。本号は何かか確保することができました。本欄を借りて年末のご挨拶を送ります。「全国の皆様方、よいお年を!!」

会報編集委員会一同

日本山岳会会報 山 607号

1995年(平成7年)12月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会
〒102
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433

振替口座 東京3-4829

発行者 村木潤次郎
編集人 伊藤 徹
印刷 株式会社 双陽社